

# アドヴァイタ學派における主宰神觀の變容 —マドゥスーダナ・サラスヴァティーの 「アートマンの四状態説」—

眞 鍋 智 裕

## 1. はじめに

アドヴァイタ學派は、インド哲學學派のうち聖典「ウパニシャッド」の解釋學派であるヴェーダーンタ學派の一派である。その特徴は、宇宙の究極的な精神原理ブラフマン (brahman, 梵) 以外を虚構であると主張する精神一元論である。更に、そのブラフマンと我々生類の精神原理であるアートマン (ātman, 我) とが全く同一であること (梵我一如, brahmātmaikyatva) を悟ることが、輪廻からの解脱であると考えている。このようなブラフマン一元論に立脚すると、全知全能であり、世界を創造する神である主宰神 (īśvara) も、我々生類、即ち個我 (jīva) と同様に、無明 (avidyā) による制約を受けた存在であり、ブラフマンよりも次元の劣るものである。また、この主宰神は、全知全能ではない我々よりは高次の存在とはされるが、生類の解脱に積極的に關與する救済神ではないとされている<sup>(1)</sup>。しかし、主宰神を奉じるシヴァ派やヴィシュヌ派の勢力の擴大、更に一神教であるイスラーム王朝の樹立等の影響のため、16世紀に活躍したマドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī) は、主宰神に對する絶對的歸依であるバクティ (bhakti, 信愛) の教説をアドヴァイタ教學の中に位置づけ、アドヴァイタ學派における主宰神が救済神へと變容する端緒を開いたと考えられている<sup>(2)</sup>。

このマドゥスーダナは、二つの立場から著作を著している。一つは、アドヴァイタ學派の立場の著作である。もう一つは、ヴィシュヌ神を救済神とするバーガヴァタ派 (Bhāgavata) の立場の著作である。この二つの立場の關係に

(1) Mahādevan[1938] pp. 165-176, 中村 [1989] pp. 261-295 参照。

(2) 前田 [1982] pp. 471f., Nelson[2004], Gupta[2006] pp. 119f. 等参照。

關して、マドゥスーダナは、アドヴァイタ學派の教義によってバーガヴァタ派の有神論教義を基礎づけようとしている。このうち、バーガヴァタ派の立場の著作に基づいたマドゥスーダナの主宰神論に関しては先行研究が存在する<sup>(3)</sup>が、アドヴァイタ學派の立場の著作に基づいた主宰神論を扱った研究は今まで十分になされていない<sup>(4)</sup>。マドゥスーダナは、アドヴァイタ學派の開祖シヤンカラ (Śaṅkara, ca. 756-772<sup>(5)</sup>) に歸される著作 *Daśaśloki* に對する註釋書 *Siddhāntabindu* (SB) を著しており、このSBにおける主宰神觀には、マドゥスーダナの時代までの他のアドヴァイタ論師の教説との相違が窺われる。本稿では、その主宰神觀の相違が窺われる、アドヴァイタ學派の傳統教義「アートマンの四状態説」に對するSBの議論を、他のアドヴァイタ論師の説と比較しながら検討し、主宰神觀の相違がどのようなものであるかを明らかにしたい<sup>(6)</sup>。

## 2. 「アートマンの四状態説」について

「アートマンの四状態説」<sup>(7)</sup>とは、紀元後1~2世紀頃成立<sup>(8)</sup>したとされる *Māṇḍūkyaopaniṣad* (MāṇḍUp) に基づいて展開していったアドヴァイタ教説である。MāṇḍUp では、アートマンに四つの境位 (pāt, 足) があるとされる<sup>(9)</sup>。

(3) 日野[1985a], [1985b], Nelson[1986], [1988], [1989], [2004], Saha[2014], Venkatkrishnan [2015] pp. 195-204 等。

(4) この點に關する研究として、日野[1988], Gupta[2006] がある。

(5) Harimoto[2006] に依る。

(6) 筆者は眞鍋[2014]と眞鍋[2015]において、マドゥスーダナの著作 *Paramahamsapriyā* やマドゥスーダナに歸されている *Īśvarapratīpattiprakāśa* (ĪPP) において、ヴィシュヌ派の一派パンチャラートラ派 (Pāñcarātrika) の教義であるヴィシュヌ神の vyūha 説が、本稿で検討する「アートマンの四状態説」によってアドヴァイタ學説化されて採り入れられていることを指摘した。本稿は、その「アートマンの四状態説」に關するマドゥスーダナの思想的獨自性を明らかにする目的も有している。なお、ĪPP に關してはマドゥスーダナの著作であるかどうかには眞偽問題が存在するが、その點に對する筆者の現時點での立場は眞鍋[2015] fn. (3) を参照。

(7) このような名稱がアドヴァイタ學派内で確立されていた譯ではないが、本稿で使用している諸文獻に見られる用語 (\*ātmano 'vasthācatuṣṭayam 等) から、MāṇḍUp に基づくアドヴァイタ教學を、筆者はこのように呼んでいる。

(8) 中村[1990] pp. 608-613 による。

(9) MāṇḍUp 2-7. 中村[1955] pp. 289-299 参照。

MāṇḍUp における「アートマンの四状態説」をまとめたものを、表 1 に示す。

表 1 MāṇḍUp の「アートマンの四状態説」

第四の境位	名稱	アートマンそのもの
	特性	第四状態 (catuurtha)
第三の境位 <sup>(10)</sup>	名稱	プラージュニヤ (prājña, 智慧我) = 主宰神
	享受対象	歡喜
	特性	熟睡状態 (suṣuptasthāna)
第二の境位	名稱	タイジャサ (taijasa, 光明我)
	享受対象	微細なもの (夢眠状態の認識対象)
	特性	夢眠状態 (svapnasthāna)
第一の境位	名稱	ヴァイシュヴァーナラ (vaiśvānara, 普遍我)
	享受対象	粗大なもの (覺醒状態の認識対象)
	特性	覺醒状態 (jāgaritasthāna)

この MāṇḍUp に説かれるアートマンは、シャンカラの MāṇḍUp に對する註釋書 (*Māṇḍūkyaopaniṣadbhāṣya*, MāṇḍUpBh) において、現象世界を主宰する、いわゆる大宇宙 (マクロコスモス) 的な「神に關する」(adhidaivam) アートマンと、我々生類に對應する、小宇宙 (ミクロコスモス) 的な「個我に關する」(adhyātmam) アートマンとに二分された<sup>(11)</sup>。このシャンカラによるアートマンの二分化を

(10) 第三の境位に關して、特性が熟睡状態にも關わらずその名稱が智慧我であったり、また享受対象が歡喜であったりすることに違和感を覺えることと思われる。しかしアドヴァイタ學説においては、熟睡状態とは、本來的には非精神的なものである思考器官 (manas) の活動が停止した状態であり、その活動にもとづいて現れる現象世界の差別相が一時的に消え、不二の識別知が顯現する状態である。また、アートマンの本質である歡喜が一時的に感受される状態でもある。この點に關しては MāṇḍUpBh on MāṇḍUp 5 を参照。

(11) MāṇḍUpBh 179.17-20 (on MāṇḍUp 3): katham ayam ātmā brahmeti pratyagātmano 'sya catuṣpāṭtve prakṛte dyulokādīnām mūrhdhāyaṅgatvam iti, naiṣa doṣaḥ. sarvasya prapañcasya sādhdidaivikasyānenātmanā catuṣpāṭtvasya vivakṣitatvāt. evaṃ ca sati sarvaprapaṇca upaśame 'dvaitasiddhiḥ (どうして、このアートマンはプラフマンである、という、この個我 (pratyagātman) が四足を有するという論題に關して、神の世界等が頭等を支分とするのか、というとなれば、これは過失ではない。神に關する [世界と] 共に一切の現象世界が四足を有することが、このアートマン [という語] によって述べられようとしているから。そしてこのようであれば、全ての現象世界が止滅する時、不二が成立する)。なお、MāṇḍUpBh の和譯に際して、Gambhīrānanda[1958], Nikhilānanda[2006] を参照した。

表にしたものを、表2として示す。

表2 シャンカラによる二つのアートマンへの分化

	個我に関するアートマン	神に関するアートマン
第四状態	アートマンそのもの	
第三状態	ブラージュニャ	主宰神
第二状態	タイジャサ	ヒラニヤガルバ (hiraṇyagarbha, 黄金の胎兒)
第一状態	ヴィシュヴァ (viśva, 一切我)	ヴァイシュヴァーナラ

シャンカラによれば、神に関するアートマンと個我に関するアートマンとのそれぞれに、第三状態以下の三状態が存在する。これは、MāṇḍUp に説かれていた第三状態におけるブラージュニャと主宰神との対応関係を、第二状態と第一状態にも適用したものと考えられる。また、ここに挙げられているヴィシュヴァ等の名称は、古代のヴェーダ聖典以来、最高神や原理の名称とされてきたものである。

また「アートマンの四状態説」は、瞑想の方法や現象世界の創出 (sr̥ṣṭi) と歸滅 (pralaya) を説明する際に説かれてきた。現象世界の創出の場合は、第四状態から第一状態へ、瞑想の方法と現象世界の歸滅の場合は、第一状態から第四状態へ、という順序となる。

本稿ではSB との比較対象として、14 世紀に活躍した<sup>(12)</sup> ヴィディヤーラニヤ (Vidyāraṇya) の *Pañcadaśī* (PD)<sup>(13)</sup> に見られる「アートマンの四状態説」を取り上げる<sup>(14)</sup>。PD の「アートマンの四状態説」は、シャンカラの「アートマンの四状態説」を受け継いだもの<sup>(15)</sup>であり、また16世紀までのアドヴァイタ

(12) 前田 [1980] p. 47 参照。

(13) PD の和譯に際して、Dhole[1899] を参照した。

(14) PD に關して、ヴィディヤーラニヤではなく、バーラティーティールタ (Bhāratīr̥tha, ca.14<sup>th</sup>) の著作であるとする説もある。

(15) 以下では、PD において、神に関するアートマンの各三状態と個我に関するアートマンの各三状態とが一対一対応をしていることを確認するが、シャンカラも同様のことを説いている。MāṇḍUpBh 180.2.7 (on MāṇḍUp 3): yuktam evāsyādhyātmikasya piṇḍātmano dyulokādyaṅgatvena virāḍātmanādhidaiivikenaikatvam abhipretya saptāṅgatvavacanam ...

學派における傳統説と言える<sup>(16)</sup>。例えば、PDにおける「アートマンの四状態説」は、サダーナンダ (Sadānanda, ca. 1500<sup>(17)</sup>) の *Vedāntasāra* (VeS) の教説に受け継がれている<sup>(18)</sup>。更に、マドゥスーダナの同世代の後輩であるアッパヤ・ディークシタ (Appaya Dīkṣita, ca. 1550<sup>(19)</sup>) の *Siddhāntaleśasaṃgraha* (SLS) における「アートマンの四状態説」は、このPDに依據したものである<sup>(20)</sup>。

PD 第一章では、「アートマンの四状態説」が現象世界の創出の過程を説明するものとして述べられている。表3 (本稿末尾掲載) に、PD 第一章に見られる「アートマンの四状態説」の分析の結果を示している。一方、マドゥスーダナのSBにおける「アートマンの四状態説」は、DS 第8偈に対する註釋箇所

---

virāja ekatvam upalakṣaṇārthaṃ hiranyagarbhāvyaḥkṛtātmanoh ... suṣṭvāvyākṛtayos tv ekatvaṃ siddham eva nirviśeṣatvāt (この個我に關する身體を本性とするものが、神の世界等を肢體とするものとして、神に關するヴィラージュを本性とするものと同一であることを意圖して、「七支分を有する」という語があることは全く道理に適っている。……ヴィラージュが [ヴィシュヴァと] 同一であることは、ヒラニヤガルバと未發現者を本性とするものが [タイジャサとブラージュニヤと同一であることを] 暗示する意味である。……一方、熟睡 [状態] と未發現者が同一であることは必ず成立する。[兩者の限定條件の] 違いを缺いているから)。

(16) PD は、マドゥスーダナの著作 *Vedāntakalpalatikā* (VKL) において議論の根據として引用されており、マドゥスーダナはPDを權威ある文獻と考えていたと考えられる。そのため、PDの説と相違する點を指摘することで、マドゥスーダナの思想の獨自性が明確に浮かび上がると考える。

しかし、PDとは異なる系統の「アートマンの四状態説」として、サルヴァジュニヤートマン (Sarvajñātman, ca. 8-9<sup>th</sup>/10<sup>th</sup>?) の *Pañcaprakriyā* (PPr) 第三章やシャンカラに歸せられている *Pañcikaraṇa* (PK) にみられる「アートマンの四状態説」がある。SBにおける「アートマンの四状態説」は、PD系統とPPr, PK系統兩方の影響を受けていると考えられる。この點に關して、別稿を豫定している。

(17) 前田 [1980] p. 49 參照。

(18) VeS の「アートマンの四状態説」に關して、中村 [1996] pp. 232-257, 299-322 參照。

(19) 前田 [1980] p. 49 參照。

(20) SLS では、「アートマンの四状態説」を述べるに當たって、以下の記述が見られる。

SLS 96.6-8: ittham, santy adhidaivatam adhyātmaṃ ca paramātmanāḥ saviśeṣāṇi trīṇi trīṇi rūpāṇi. tatrādhidaivatam trīṇi śuddhacaitanyaṃ ceti catvāri rūpāṇi citrapāṭadrṣṭāntena citradīpe samarthitāni (以下のように、最高のアートマンには、神に關して、また個我に關して、特殊性を有する、それぞれ三つの姿がある。そのうち、神に關して、三つ [の姿] と純粹な精神性という、多彩な織物の實例によって、[PDの第六章]「チットラ・ディーパ [章]」において論證された、四つの姿がある)。また、神に關するアートマンの四状態だけでなく、個我に關するアートマンに關しても、SLSはPDを踏まえたものとなっている。Sastri[1935] pp. 166f. 參照。

で説かれている<sup>(21)</sup>。表4（本稿末尾掲載）に、SBにおける「アートマンの四状態説」の分析の結果を示している<sup>(22)</sup>。

ここで、表3と表4とを比較してみると、先ず、個我に關するアートマンについて、PDにおいては神に關するアートマンに分類されているヒラニヤガルバとヴァイシュヴァーナラが、SBでは個我に關するアートマンの限定條件の名稱となっているという相違がある。そうではあるけれども、個我に關するアートマンの構造自體は、PDとSBに相違は存在しない。しかし、神に關するアートマンに關して、相違が存在していることが分かる。即ち、SBにおいて主宰神は、神に關するアートマンそのもののことである。このことは、PDとSBとにおいて主宰神觀に相違が存在しているということである。

(21) SB 76,16-24: adhyātmaṃ viśvaḥ, adhibhūtaṃ virāt, adhidaivaṃ viṣṇuḥ, adhyātmaṃ jāgrat, adhidaivaṃ pālanam, adhibhūtaṃ sattvaguṇaḥ, evam adhyātmaṃ taijasaḥ, adhibhūtaṃ hiraṇyagarbhaḥ, adhidaivaṃ brahmā, adhyātmaṃ svapnaḥ, adhidaivaṃ sṛṣṭiḥ, adhibhūtaṃ rajoṅgaḥ, evam adhyātmaṃ prājñaḥ, adhibhūtaṃ avyākṛtam, adhidaivaṃ rudraḥ, adhyātmaṃ susuptiḥ, adhidaivaṃ pralayaḥ, adhibhūtaṃ tamoguṇaḥ. ... etatsarvopādhinirākaraṇena sāksīcāitanyamātrajñānena tu sāksād eva mokṣa itī (〔第一状態〕個我に關してはヴィシュヴァであり、元素に關してはヴィラージュであり、神に關してはヴィシュヌ〔神〕である。個我に關しては覺醒〔状態〕であり、神に關しては維持であり、元素に關しては純質性である。〔第二状態〕同様に、個我に關してはタイジャサであり、元素に關してはヒラニヤガルバであり、神に關してはブラフマー〔神〕である。個我に關しては夢眠〔状態〕であり、神に關しては創出であり、元素に關しては激質性である。〔第三状態〕同様に、個我に關してはブラージュニヤであり、元素に關しては未發現者であり、神に關してはルドラ〔神〕である。個我に關しては熟睡〔状態〕であり、神に關しては歸滅であり、元素に關しては暗質性である。……〔第四状態〕しかし、この一切の限定條件を否定する、目撃者たる精神性のみを知ることによって、即時に解脱がある)。尚、表4はこのSBを更に整理したものである。

(22) ここで、この表3と表4について説明する。先ず、表の「限定條件」という項目に關して、アドヴァイタ學派では、唯一のブラフマンが何らかの制約 (upahita) を受けることで、主宰神や個我等の多様な現象世界が現れる、と考えられており、そのブラフマンを制約するものを限定條件と呼んでいる。ブラフマンが制約を受けることや、その制約するものは、テキスト上では他の様々な表現によっても表されている。例えば、限定條件を「私と思ひなす」(abhimāna) や、限定條件「の中に(處格)ある」という表現がなされている。本稿では、それらの表現を、全て「制約を受ける」という表現に統一している。また、その制約するものは、「限定條件」という用語に統一して使用している。

そして、表の矢印は、各状態間で、限定條件とアートマンの状態が變容していることを表している。更に、各項目の色の濃淡は、表3と表4における、限定條件の對應に基づく各状態間の對應關係を表している。

本稿では、PD と SB とにおける主宰神觀の相違について、以下の二つの觀點から考察する。第一に、各テキストにおける、神に關するアートマンと個我に關するアートマンとの違いは何か、という點（考察點1）である。第二に、各テキストにおいて、神に關するアートマンの三状態と個我に關するアートマンの三状態とがどのように對應づけられるのか、という點（考察點2）である。

### 3. 傳統的な「アートマンの四状態説」

先ず、PD から考察したい。初めに第三状態の記述を檢討する

Passage 1 PD 1.15-17.

cidānandamayabrahmapratibimbamanvitā /  
tamorajaḥṣattvagunā prakṛtir dvidividhā ca sã //15//  
sattvaśuddhyaviśuddhibhyāṃ māyāvīdye ca te mate /  
māyābimbo vaśīkṛtya tām syāt sarvajña īśvaraḥ //16//  
avidyāvaśagas tv anyas tadvaicitryād anekadhā /  
sā kāraṇaśarīraṃ syāt prājñas tatrābhimānavān //17//

原質は、心 (cit) と歡喜 (ānanda) から成るブラフマンの映像 (pratibimba) を宿し、(i) 暗質 (tamas), 激質 (rajas), 純質 (sattva) という屬性 (guṇa) を有している。そしてそれは二様である。そして、(ii) 純質が清淨であるか清淨でないかによって、それ (原質の二様なあり方) はマーヤー (māyā, 幻力) と無明 (avidyā) であると考えられる。(iii) マーヤーにある [ブラフマンの] 像 (bimba, 即ち映像) はそれ (マーヤー) を制御して、一切知者 (sarvajña) たる主宰神 (īśvara) となろう。一方、(iv) 他方の、無明に從屬する [ブラフマンの映像] は、その (無明の) 多彩性によって、多様である。それ (無明) は原因という身體 (kāraṇaśarīra) となろう。ブラージュニヤは、それ (無明である原因という身體) に對して私という思いなしを持つ (abhimānavat) [無明に從屬するブラフマンの映像、即ち個我 (\*jīva)] である。

ここでは、神に関するアートマンである主宰神も、個我に関するアートマンであるブラージュニヤも、ともにブラフマンが制約されたものとされている。兩者の違いは、マーヤーと無明というその限定条件の違いに由来するものである。實は、マーヤーも無明も、ともに原質 (prakṛti) であるとされる。この原質とは、波線部 (i) から、暗質・激質・純質という三屬性 (\*triguṇa) から成る物質的原理であり<sup>(23)</sup>、波線部 (ii) から、その純質が清淨である場合はマーヤー、純質が不淨である場合は無明であるとされている。したがって、主宰神とブラージュニヤの違いは、この原質の純質が、清淨であるか、不淨であるかという点によると考えられる。

ところで、このブラージュニヤは、波線部 (iv) によると、無明が多彩、即ち多数であることによって、多様、即ち多数であると述べられている。一方、主宰神に関しては、特に數に關する記述がないが、VeSの記述を参考にする、マーヤーは個別の無明の總體であり、一つであると考えられる<sup>(24)</sup>。したがって、もちろん主宰神も唯一である。

續いて、第二状態の記述を検討する。

Passage 2 PD 1.18-24.

tamaḥpradhānaprakṛtes tadbhogāyeśvarājñayā /  
viyatpavanatejoṃbubhuvo bhūtāni jajñire //18//

...

buddhikarmendriyapraṇapañcakair manasā dhiyā /  
śarīraṃ saptadaśabhiḥ sūkṣmaṃ tal liṅgam ucyate //23//  
prājñas tatrābhimānena taijasatvaṃ prapadyate /

(23) この原質 (prakṛti) という概念は、サーンキヤ學派 (Sāṃkhya) の概念を採り入れたものである。

(24) VeS 25.14f.: idam ajñānaṃ samaṣṭivyaṣṭyabhiprāyenaikam anekam iti ca vyavahriyate (この無知は、總體か個別體を意圖することによって、一つであるとも、多数であるとも言い表される)。VeSでは、マーヤーと無明、無知が特に區別されておらず、全て無知と呼ばれている。上記のVeSに説かれている、一つであり、總體が意圖されている無知がマーヤーに相當する。

hiranyagarbhatām īśas tayor vyaṣṭisamaṣṭitā //24//

(v) 暗質が優勢な原質から、彼（プラージュニヤ）の享受のために、主宰神の主宰力によって、虚空、風、火、水、地という諸元素が生じた。……それぞれ五つの知覺器官 (buddhīndriya) と行爲器官 (karmendriya) と氣息 (purāṇa), [更に] 思考器官 (manas) と統覺 (dhī) によって、十七 [器官] による身體がある。それは、微細 (sūkṣma) であり徴表 (līṅga) であると言われる。 (vi) それ（微細な身體）に對して私と思ひなすこと (abhimāna) によって、プラージュニヤはタイジャサであることを得、支配者 (īśa, = 主宰神) はヒラニヤガルバであることを得る。 (vii) 両者は [それぞれ] 個別體 (vyaṣṭi) と總體 (samaṣṭi) である。

第二状態においては、神に關するアートマンと個我に關するアートマンの限定條件は共通しており、それは微細な元素からなる微細な身體である。波線部(v)によると、それは第三状態の限定條件である原質が變容したものである。波線部 (vi) によると、その限定條件の變容にしたがって、主宰神はヒラニヤガルバになり、一方、プラージュニヤはタイジャサになるとされる。

また、波線部 (vii) によると、神に關するアートマンであるヒラニヤガルバと、個我に關するアートマンであるタイジャサとの關係は、總體 (samaṣṭi) と個別體 (vyaṣṭi) の關係にあるとされている。これは、第三状態において、個別の無明の總體であるマーヤーに制約されたブラフマンが主宰神になり、一方、多數の個別の無明に制約されたアートマンがプラージュニヤになる、という關係と同様のものである。そのため、マーヤーの變容したものが總體としての微細な身體であり、無明の變容したものが個別體としての微細な身體である、ということを含意していると考えられる<sup>(25)</sup>。

續いて、第一状態を檢討する。

(25) この總體と個別體という概念は、既に *Brahmasūtra* (BS) に對するシャンカラの註釋である *Brahmasūtrabhāṣya* (BSBh) 等に見られる。例えば、BSBh on BS 3.3.57 等。湯田 [2007] pp. 293-297 參照。

Passage 3 PD 1.26-29.

tadbhogāya punar bhogyabhogāyatanañjanmane /  
pañcīkaroti bhagavān pratyekaṃ viyadādīkam //26//

...

tair aṇḍas tatra bhuvanabhogyabhogāśrayodbhavaḥ /  
hiraṇyagarbhaḥ sthūle 'smin dehe vaiśvānaro bhavet //28//

taijasā viśvatāṃ yātā devatiryāñnarādayaḥ /  
te parāṅdarśinaḥ pratyaktattvabodhāvivarjitāḥ //29//

(viii) 彼(タイジャサ)の享受(bhoga)のため,更に,享受されるもの(bhogyā)と享受の據所(bhogāyatana)を生み出すために,主(bhagavad,主宰神),虚空等[の微細な元素]を,各々五重にする. ……それら(五重化した粗大な諸元素)によって,[梵]卵が[生じる].そこにおいて,世界(bhuvana)という享受されるものと享受の據所の生起がある.(ix)ヒラニヤガルバは,この粗大な身體において,ヴァイシュヴァーナラとなる。 (x) [また,]神(deva),動物(tiryāñc),人間(nara)等の諸のタイジャサは,[この粗大な身體において] ヴィシュヴァであることになる. 彼等は,内的な眞實の覺知を缺いた,外的なものを見る者達である.

第一状態においても, 個我に關するアートマンであるヴィシュヴァと, 神に關するアートマンであるヴァイシュヴァーナラの限定條件は共通しており, それは粗大な元素からなる粗大な身體である. 波線部 (viii) によると, 粗大な元素は, 第二状態の限定條件である微細な元素が變容したものである.

このPassage 3では, 總體, 個別體, という用語は見られないが, 波線部 (ix), (x) によれば, 第二状態の總體であるヒラニヤガルバがヴァイシュヴァーナラになり, 個別體であるタイジャサがヴィシュヴァになるとされているため, この第一状態でも, ヴァイシュヴァーナラとヴィシュヴァとは, 總體と個別體の關係にあると考えられる<sup>(26)</sup>.

(26) SLSでは, 明確にこの第一状態も總體と個別體の關係にあることが示されている.

以上のPDの「アートマンの四状態説」の考察を、神に關するアートマンと個我に關するアートマンとの違いは何か、という「考察點1」と、神に關するアートマンと個我に關するアートマンの各三状態の對應關係という「考察點2」についてまとめると、以下のようになろう。

「考察點1」に關しては、以下の二つの考え方が想定される。第一の考え方として、神に關するアートマンと個我に關するアートマンとの區別は、限定條件である原質の純質が清淨であるか不淨であるかの違いに依る、ということが擧げられる。しかし、第三状態から第一状態において、神に關するアートマンと個我に關するアートマンは、唯一の總體と多數の個別體という對比で捉えられていた。そのため、第二の考え方として、神に關するアートマンと個我に關するアートマンとの區別は、唯一の總體と無數の個別體という對比關係として捉えられる、ということが擧げられる。第一の考え方は、PDに直接書かれているものであるが、後に見るマドゥスーダナ説との違いを考慮に入れると、第二の考え方で捉えた方がより實情に即していると考えられる<sup>(27)</sup>。

次に「考察點2」に關して、神に關するアートマンと個我に關するアートマンは、各状態間で限定條件が變容していくにしたがって、主宰神からヒラニヤガルバへ、或いはプラージュニヤからタイジャサへ、というように、各状態間で各々變容している。そのため、神に關するアートマンの三状態と個我に關するアートマンの三状態は、各状態が一對一の對應關係にあると言うことが出来る。

---

SLS 98.1: jāgare vyaṣṭisthūlaśarīrābhīmānī viśvaḥ (覺醒状態において、個別的な粗大な身體を私と思いなすものがヴィシュヴァである)、SLS 97.2: pañcikṛtabhūtakāryasamaṣṭi-sthūlaśarīropahito virāṭ puruṣaḥ (五重化した元素の結果の總體である粗大な身體によって制約されたものがヴィラージュたるブルシャである)。

(27) 後に見るように、マドゥスーダナのSBでも、「Passage 1」のPD同様、神に關するアートマンに對應する主宰神と、個我に關するアートマンに對應する個我との違いを、無明という限定條件に內的器官とその潛勢力が存在しているか否か、という限定條件の質の違いに求めている。また、SBでもPD同様に總體と個別體という枠組みが考えられているが、それらは共に個我的分類であり、主宰神と個我との關係に關わる要因としては捉えられていない。この點は、神に關するアートマンを總體として捉え、個我に關するアートマンを個別體として捉えているPDと好對照をなしている。

#### 4. マドゥスーダナの「アートマンの四状態説」

SBでは、神に関するアートマンは主宰神に該当し、個我に関するアートマンは個我 (jīva) に該当する。[考察点1]の神に関するアートマンと個我に関するアートマンとの違いとは何か、ということに関して、主宰神と個我との相違が、以下のように述べられている<sup>(28)</sup>。

[Passage 4] SB 53,5f.: kārāṇībhūtājñānopādhir īsvaraḥ. antaḥkaraṇatatsam-skārāvaccinnājñānopahito jīvaḥ.

主宰神とは、原因となる無知 (ajñāna) という限定条件を有するものである。個我とは、内的器官とその潜勢力によって限定された無知に制約されたものである。

[Passage 4]では、限定条件が無知とされているが、これは[表4]における、神に関するアートマンとプラージュニヤの限定条件である無明の別称である。主宰神と個我は、ともに無知を限定条件としているが、その無知に内的器官とその潜勢力が存在しない場合は主宰神であり、それらが存在する場合は個我である、ということである。それ故、[考察点1]の神に関するアートマンと個我に関するアートマンとの違いとは、限定条件における内的器官とその潜勢力の有無に基づくものであることが分かる。

ところで、この区別に従えば、[考察点2]の神に関するアートマンと個我に関するアートマンの各三状態の対応関係に関して、以下のことが指摘される。マドゥスーダナにとって、PDにおける神に関するアートマンの第二状態であるヒラニヤガルバと、第一状態であるヴァイシュヴァーナラは、實は、その限定条件に内的器官が含まれるため、神に関するアートマンではなく、個我に関するアートマン、即ち個我 (jīva) である、ということになる。

以下では、この点を確認したい。[Passage 5]では、個我に関するアートマン

(28) SBの和譯に際して、Modi[1929], Subrahmanian[1989]を参照した。

に該當する、個我の三状態の限定條件が述べられている。

Passage 5 SB 53,21-24: tatrāvidyāntaḥkaraṇasthūlaśārīrāvachchinno jāgradavasthābhimānī viśvaḥ. sa eva sthūlaśārīrābhimānarahita upādhi-dvayopahitaḥ svapnābhimānī tajasaḥ. śārīrāntaḥkaraṇopādhidvayarahitaḥ antaḥkaraṇasaṃskārāvachchinnavidyāmātropahitaḥ suṣuptyabhimānī prājñāḥ.

その（三つの個我の）うち、(xi) ヴィシュヴァとは、無明 (avidyā)、内的器官、粗大な身體 (sthūlaśārīra) に限定された、覺醒状態を私と思いなす (abhimānin) [個我] である。 タイジャサとは、同じそれ (個我) で、粗大な身體を私と思いなすことを缺いており、二つの限定條件 (内的器官と無明) に制約された、夢眠 [状態] を私と思いなす [個我] である。 プラージュニヤとは、身體と内的器官という二つの限定條件を缺いており、内的器官の潛勢力に限定された (avacchinna) 無明のみに制約された、熟睡 [状態] を私と思いなす [個我] である。

この波線部 (xi) から、SB の個我に關するアートマンの第二状態と第一状態の限定條件には、内的器官が含まれていることが分かる。しかし、この波線部 (xi) は、PD (表3) の場合の、個我に關するアートマンに相當する、ヴィシュヴァとタイジャサに關する記述であり、神に關するアートマンに相當する、ヴァイシュヴァーナラとヒラニヤガルバに關する記述ではない。したがって、この記述のみから、SB においてヴァイシュヴァーナラとヒラニヤガルバが、個我に關するアートマンと考えられているかどうかは分からない。

實は内的器官は、PD においても SB においても、微細な身體を構成する十七器官中に含まれるものである<sup>(29)</sup>。したがって、「内的器官」という語は微

(29) SB 56,27: etac ca sarvaṃ militvā saptadaśakam liṅgam (そして、以上 [微細元素から成る二種の内的器官、五つの氣息、五つの行爲器官、五つの感覺器官の] 全てが集って十七 [器官] から成る微細身がある)。このSBの記述における「二種の内的器官」とは、PD (Passage 2) 波線部 (v) に見られる統覺と思考器官と同じものである。

細な身體を代表したものであると考えることが出来る。更に微細な身體に關して、SB に以下の記述が見られる。

Passage 6 SB 57.2: ayam amūrtapadārthaḥ kāryatvād vyaṣṭau samaṣṭau ca jīvopādhir eva.

この無形なもの(微細な身體)という語の對象は、[無明の]結果であるので、  
(xii) 個別體の場合にも總體の場合にも、個我の限定條件に他ならない。

波線部 (xii) から、SB において微細な身體は、個別體だけでなく、總體の場合も個我の限定條件である、と考えられていることが分かる。そのため、微細な身體、即ち內的器官を限定條件に含み、かつ總體である PD のヒラニヤガルバとヴァイシュヴァーナラム、SB では個我、即ち個我に關するアートマンであることになる<sup>(30)</sup>。

ところで、以上のものであるとすると、SB (表4) では PD (表3) の神に關するアートマンの第二状態と第一状態の該當箇所が缺落してしまうことになる。しかし SB (表4) では、神に關するアートマンの三状態は完備している。更に言えば、三状態は全て SB における主宰神の三分類となっている。

これらのことから、先ず、考察點2神に關するアートマンと個我に關する

(30) 第一状態の粗大な元素に關しては特に記述は存在しないが、Passage 5に見られるように、第一状態の限定條件には內的器官も含まれているため、總體の場合も個別體の場合も、個我の限定條件であると考えられる。

また、以下のマドゥスーダナの著作 *Bhagavadgītāgūḍhārthadīpikā* (BhGGAD) の記述も参照。BhGGAD 186,36-38 (on BhG 4.6): yadi tasya śarīraṃ sthūlabhūtakāryaṃ syāt tadā vyaṣṭirūpatve jāgradavasthāsmadādityatvam. samaṣṭirūpatve ca virāḍjīvatvaṃ tasya tadupādhivāt. atha sūkṣmabhūtakāryaṃ tadā vyaṣṭirūpatve svapnāvasthāsmadādityatvam. samaṣṭirūpatve ca hiraṇyagarbhajīvatvaṃ tasya tadupādhivāt (もしも、彼(主宰神)の身體が粗大元素の結果であるとする、その場合、[主宰神が] 個別的なあり方をしてい時、[主宰神は] 覺醒状態にある我々等と等しいこととなる。そして、[主宰神が] 總體的なあり方をしてい時、彼はヴィラーージュという個我である。それ(粗大元素)を限定条件としているから。もしも、[主宰神の身體が] 微細元素の結果であるとする、その場合、[主宰神が] 個別的なあり方をしてい時、[主宰神は] 夢眠状態にある我々等と等しいこととなる。そして、[主宰神が] 總體的なあり方をしてい時、彼はヒラニヤガルバという個我である。それ(微細元素)を限定条件としているから)。BhGGAD の和譯に際して、Gambhīrānanda[1998]を参照した。

アートマンの各三状態の對應關係に關して以下のことが推測出來よう。第一に、SB（表4）の神に關するアートマンの三状態は、PD（表3）の神に關するアートマンの第三状態である主宰神を三つに分類したものではないか、と推測される。またこのことから、第二に、表4で主宰神を三つに分類したのは、表3の神に關するアートマンの第二状態と第一状態の該當箇所<sup>31</sup>の缺落を補うためではないか、ということも推測される。

以下では、上記二點を檢討する。Passage 7は、SBの神に關するアートマンに該當する主宰神の三状態を述べたものである。

Passage 7 SB 53,10-14: *īśvaro 'pi trividhaḥ, svopādhibhūtāvidyāguṇatrayabhedena viṣṇubrahmarudrabhedāt. kāraṇībhūtasattvaguṇāvacchinno viṣṇuḥ pālayitā. kāraṇībhūtarajaupahito brahmā sraṣṭā ... kāraṇībhūtata-  
maupahito rudraḥ saṃhartā.*

(xiii) 主宰神も三種である。自ら（主宰神）の限定條件である無明の三つの屬性の違いによって、ヴィシュヌ〔神〕・ブラフマー〔神〕・ルドラ〔神〕の違いがあるから、原因となるもの（無明）の純質性に限定された者がヴィシュヌ〔神〕であり、維持者（pālayitr）である。原因となるもの（無明）の激質によって制約された者がブラフマー〔神〕であり、創出者（sraṣṭr）である。……原因となるもの（無明）の暗質によって制約された者がルドラ〔神〕であり、破壊者（saṃhartr）である。

表4の神に關するアートマンの三状態であるヴィシュヌ神、ブラフマー神、ルドラ神は主宰神の分類である<sup>(31)</sup>。また、その主宰神は、神に關するアートマンの三状態の限定條件である純質、激質、暗質からなる無明を限定條件とするとされている。更に、Passage 1波線部 (i), (iii) においては、PDの主宰神も純質、激質、暗質からなるマーヤーを限定條件としている、と述べられている。なお、SBではマーヤーと無明は區別されず、ともに無明と呼ばれている。

(31) 表4におけるヴィシュヌ神、ブラフマー神、ルドラ神の各状態への配當に關して、fn. 21 參照。

以上のことから、SB (Passage 7) の主宰神と、PD (表3) の神に関するアートマンの第三状態である主宰神とは同じ存在である<sup>(32)</sup>。

以上のことから先ず、考察点2の神に関するアートマンと個我に関するアートマンの各三状態の対応関係に關して、以下のことが言える。SB (表4) の神に関するアートマンの三つの状態は全て、PD (表3) の神に関するアートマンの第三状態である主宰神のみに對應しており、それを三つに分類したものである。

またこのことから、表4で主宰神を三つに分類しているのは、表3の神に関するアートマンの第二状態と第一状態の該當箇所が脱落してしまうのを補うため、と考えることが出来る<sup>(33)</sup>。マドゥスーダナが神に関するアートマンの第二状態と第一状態の脱落を補っているのは、PD等の「アートマンの四状態説」の伝統的な枠組み自体は保持しようとしているためである、と考えられる。

## 5. 結論

以上の考察から、マドゥスーダナの主宰神観とPDを始めとする他のアドヴァイタ論師の主宰神観との相違は、以下のようであると言える。

PDを始めとする他のアドヴァイタ論師の主宰神観においては、主宰神は、その限定条件が變容するにしたがってヒラニヤガルバやヴァイシュヴァーナラに變容する。そのため主宰神は、宇宙を主宰する神の系列の一神格であると言える<sup>(34)</sup>。

(32) ĪPPにおいては、サンカルシャナ神が、「アートマンの四状態説」の神に関するアートマンの第三状態に當たる主宰神であり、その主宰神が、限定条件である無明の三つの属性の違いによって、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、ルドラ神となるということが述べられている。眞鍋[2015]参照。

(33) この主宰神の三分類は、一般に「三神一體説」(trimūrti)と言われているものである。マドゥスーダナは、この三神一體説を利用することによって主宰神の三分化を行った、と言うことも出来るよう。

(34) ヒラニヤガルバやヴァイシュヴァーナラも、マドゥスーダナ以前のアドヴァイタ學派においては「最高神」(parameśvara)として扱われている。シャンカラは、BSBhのvaiśvānarādhikaraṇa (BS 1.2. 24-32)において、ヴァイシュヴァーナラが最高神であることを論じている。湯田[2006] pp. 293-308参照。また、パドマパーダ (Padmapāda,

一方、マドゥスーダナにとって、他のアドヴァイタ論師の説くヒラニヤガルバやヴァイシュヴァーナラは個我に過ぎない。マドゥスーダナにとっては、PDの第三状態に對應する主宰神のみが、宇宙を主宰する神である。このように、宇宙を主宰する神を主宰神のみに限定することによって、マドゥスーダナは、個我に對する主宰神の特別性、超越性を強調しているのではないかと考えられる<sup>(35)</sup>。

しかし、マドゥスーダナが「アートマンの四状態説」を説くに当たり、傳統的な「アートマンの四状態説」に変更を加えた理由には、本稿で取り上げなかった別の觀點からも<sup>(36)</sup>検討を行う必要があるため、今後更に考察を加えていきたい。

---

ca. 8-9<sup>th</sup>) の *Pañcapādika* において、ヒラニヤガルバも最高神の扱いを受けている。Venkataramiah[1948] p. 139, p. 209 参照。また Mahādevan [1938] pp. 176f. 参照。

(35) しかし、マドゥスーダナ説におけるヒラニヤガルバやヴィラーージュも、従来のアドヴァイタ説における宇宙の主宰者という性格を受け継いでいる。それは、主宰神論ではなく、個我論における「一我説」(ekajīvavāda) においてである。特にヒラニヤガルバは、「第一の個我」(prathamajīva) と呼ばれ、個別體である個我の總體として言及される。マドゥスーダナの「一我説」に関しては、Timalsina[2006] pp. 127-130, [2009] pp. 34-49 参照。

(36) マドゥスーダナの「アートマンの四状態説」とヴィディヤーラニヤの「アートマンの四状態説」の違いは、マドゥスーダナが「映像説」(pratibimbavāda) の立場を取り、ヴィディヤーラニヤが「顯現説」(ābhāsavāda) の立場を取っていることによる、という學說上の相違に由来するものとも考えられる。この觀點は、本稿において述べた、神に關するアートマンと個我に關するアートマンとがどのように區別されるのか、という點と密接に關連している。

しかし、ヴィディヤーラニヤがPDにおいて「顯現説」の立場を取っていることは確かであるが、マドゥスーダナはSBにおいて「知覺創出説」(dṛṣṭisrṣṭivāda) を定説としていたり、SBの「アートマンの四状態説」は「顯現説」、「映像説」、「知覺創出説」のいずれをも中立的に扱うという體裁を採っていたりするため、SBにおいてマドゥスーダナが「映像説」に立って「アートマンの四状態説」を説いていたかどうか、未だ確定できていない。假に、マドゥスーダナが「映像説」に立って「アートマンの四状態説」を説いていたとすると、神に對する絶對的信愛であるバクティとの關わりを指摘することが出来る。「映像説」、「顯現説」、「知覺創出説」については Gupta[2006] pp. 84-99 参照。ヴィディヤーラニヤと「顯現説」に關しては、Mahādevan[1938] pp. 186-192 参照。マドゥスーダナにおける「映像説」とバクティの關係については Nelson[2004] pp. 367-371 参照。

參考文獻

一次資料

- BhGGAD *Bhagavadgītāgūḍhārthadīpikā* (Madhusūdana Sarasvatī):  
*Srīmadbhagavadgīta with the Commentaries Śrīmadśāṅkarabhā-  
ṣya with Ānandagiri, Nīlakanṭhī, Bhāṣyotkarṣadīpikā of Dhanapati,  
Śrīdhārī, Gītārthasaṃgraha of Abhinavaguptācārya, and Gū-  
ḍhārthadīpikā of Madhusūdana with Gūḍhārthattvāloka of  
Śrīdharmadattaśarmā (Bhachchāśramā)*. Ed. Wāsudev Laxmaṇ  
Shāstrī Paṇṣīkar. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1936 (2<sup>nd</sup> Ed.).
- MāṇḍUp *Māṇḍūkyoṇiṣad: Ten Principal Upaniṣads with Sankarabhāṣya*.  
(Works of Śāṅkarācārya in Original Sanskrit vol. I) Delhi: Motilal  
Banarsidass, 1964 (Repr.: 2007).
- MāṇḍUpBh *Māṇḍūkyoṇiṣadbhāṣya* (Śāṅkara): See MāṇḍUp.
- PD *Pañcadaśī* (Vidyāraṇya): *Pañcadaśī of Vidyāraṇya Muni*. Hin. Tr.  
Pt. Rama Vattar Vidya Bhaskar. (The Vrajajivan Prachya Bharti  
Granthmala 78) Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 2009.
- SB *Siddhāntabindu* (Madhusūdana Sarasvatī): *Siddhāntabindu of  
Madhusūdana with the Commentary of Purushottama*. Ed. Prahlād  
Chandrashekhara Divānji. Baroda: Oriental Institute, 1933.
- SLS *Siddhāntaleśasaṃgraha* (Appaya Dikṣita): *Śrīmadapyaḍīkṣitaviracitaḥ  
Siddhāntaleśasaṃgraha Saṭippanabhāṣānūvādena*. Ed. and Com.  
Śrīmūlasāṅkaravyāsa. Dillī: Bhāratīya Buka Kāraporeśana, 2005.
- VeS *Vedāntasāra* (Sadānanda): *Vedānta-Sāra (The Essence of Vedānta)  
of Sadānanda Yogindra*. Ed. ad Tr. Swami Nikhilananda. Calcutta:  
Advaita Ashrama, 1931 (10<sup>th</sup> Impr.: 1997).

二次資料

Dhole, Nanda Lal

[1899] *The Panchadasi of Srimad Vidyananya Swami*. Tr. (Sri Garib Das

Oriental Series No. 317) Calcutta: Sri Satguru Publications, 1899 (2<sup>nd</sup> Ed.);  
Delhi: 2008 (3<sup>rd</sup> Ed.).

Gambhīrānanda, Swāmī

[1958] *Eight Upaniṣads Vol. 2 (Aitareya, Muṇḍaka, Māṇḍūkya & Kārikā, and Praśna) With the Commentary of Śāṅkarācārya*. Tr. Kolkata: Advaita Ashrama, 1958 (16<sup>th</sup>: 2008).

[1998] *Bhagavad-Gītā with the annotation Gūḍhārtha-Dīpikā by Madhusūdana Sarasvatī*. Tr. Kolkata: Advaita Ashrama, 2007 (2<sup>nd</sup> Impr.).

Gupta, Sanjukta

[2006] *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*. London and New York: Routledge, 2006.

Harimoto, Kengo (張本研吾)

[2006] "The Date of Śāṅkara: Between the Cālukyas and the Rāṣṭrakūṭas", *Journal of Indological Studies (New title for Studies in the History of Indian Thought)* 18, Kyoto University, 2006.

Hino, Shoun (日野紹運)

[1985a] 「ヒンドウの宗教世界—不二一元論派學匠マドゥスーダナ・サラスヴァティーのバクティ觀をめぐって」 *Sambhāṣā* 6, 名古屋大學印度學佛教學研究會, 1985.

[1985b] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティー考」『印度學佛教學研究』33-2, 日本印度學佛教學會, 1985.

[1988] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーにおけるブラフマンの意義について」『成田山佛教研究所紀要』11, 佛教思想史研究 II, 成田山新勝寺, 1988.

Mahādevan, T. M. P.

[1938] *The Philosophy of Advaita*. Delhi: Bharatiya Kala Prakashan, 1938 (1<sup>st</sup> Revised Ed.: 2006).

Manabe, Tomohiro (眞鍋智裕)

[2014] 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの vyūha 說攝取の方法—シャ

ンカラの所説との對比から」『久遠—研究論文集』5, 早稲田大學佛教青年會, 2014.

[2015] 「*Īśvarapratipattiprakāśa* における諸主宰神論の統合方法の解明」  
*Waseda Rilas Journal* 3, 早稲田大學総合人文科學研究センター, 2015.

Mayeda, Sengaku (前田專學)

[1980] 『ヴェーダーンタの哲學—シャンカラを中心として— (サーラ叢書) 24』平樂寺書店, 1980.

[1982] 「十六世紀における不二一元論の變容—Madhusūdana Sarasvatīを中心として」田村芳朗還暦記念會編『田村芳朗博士還暦記念論集：佛教教理の研究』春秋社, 1982.

Modi, P. M.

[1929] *Translation of Siddhanta Bindu: Being Madhusudana's Commentary on the Das'as'loki of S'ri S'ankaracharya*. Tr. Allahabad: Vohra Publishers & Distributors, 1929 (Repr.: 1985).

Nakamura, Hajime (中村元)

[1955] 『ヴェーダーンタ哲學の發展 [インド哲學思想第三卷]』岩波書店, 1955.

[1989] 『シャンカラの思想 [インド哲學思想第五卷]』岩波書店, 1989.

[1990] 『中村元選集 [決定版] 第9卷 ウパニシャッドの思想』春秋社, 1990.

[1996] 『中村元選集 [決定版] 第27卷 ヴェーダーンタ思想の展開』春秋社, 1996.

Nelson, Lance E.

[1986] *Bhakti in Advaita Vedanta: A translation and study of Madhusudana Sarasvati's Bhaktirasayana*. Hamilton: McMaster University 1986 (Doctoral Thesis, Unpublished).

[1988] "Madhusudana Sarasvati on The "Hidden Meaning" of The Bhagavadgītā: Bhakti for The Aavaita Renunciate", *Journal of South Asian Literature* 23-2, Michigan: Asian Studies Center, Michigan State

- University, 1988.
- [1989] "*Bhakti Rasa* for the Advaitin Renunciate: Madhusudana Sarasvati's Theory of Devotional Sentiment", *Religious Traditions* 12, Cambridge: Cambridge University Press, 1989.
- [2004] "The Ontology of Bhakti: Devotion as Paramapurūsārtha in Gaudīya Vaisnavism and Madhusūdana Sarasvatī", *Journal of Indian Philosophy* 32, Netherlands: Kluwer Academic Publishers, 2004.
- Nikhilānanda, Swāmī
- [2006] *The Māṇḍūkya Upaniṣad with Gauḍapāda's Kārikā and Śaṅkara's Commentary*. Tr. Kolkata: Advaita Ashrama, 2006 (8<sup>th</sup> Impr.).
- Saha, Niranjan
- [2014] *Philosophy of Advaita Vedānta according to Madhusūdana Sarasvatī's Gūḍhārthadīpikā*. London: University of London, 2014 (Doctoral Thesis, Unpublished) downloaded from: [http://eprints.soas.ac.uk/20350/1/Saha\\_3653.pdf](http://eprints.soas.ac.uk/20350/1/Saha_3653.pdf).
- Sastri, S. S. Suryanarayana
- [1935] *The Siddhantalesasangraha of Appayya Dīkṣita with An English Translation Vol. 1 Translation*. Tr. Madras: University of Madras, 1935.
- Subrahmanian, K. N.
- [1989] *Siddhāntabindu: Madhusudana Sarasvati's Commentary on Sri Sankara's Dasasloki*. Ed. and Tr. K. N. Subramanian. Varanasi: Rishi Publications, 1989.
- Timalsina, Sthaneshwar
- [2006] *Seeing and Appearance*. Aachen: Shaker Verlag, 2006.
- [2009] *Consciousness in Indian philosophy : the advaita doctrine of "awareness only"*. London, New York: Routledge, 2009.
- Venkatarāmiah, R.D.
- [1948] *The Pañcapādikā of Padmapāda (Translated into English)*. Tr. (Gaekwad's Oriental Series No. CVII) Baroda: Oriental Institute, 1948.

Venkatkrishnan, Anand

[2015] *Mīmāṃsā, Vedānta, and the Bhakti Movement*. Columbia: Columbia University, 2015 (Doctoral Thesis, Unpublished).

Yuda, Yutaka (湯田豊)

[2006] 『ブラフマ・スートラーシャンカラの註釋 (上)』 大東出版社, 2006.

表3 PDにおける「アートマンの四状態説」(傳統説)

		個我に関して (個別體)	神に関して (總體)
第四 状態	名稱	ブラフマン	
	限定的條件	なし	
第三 状態	名稱	ブラージュニャ (個別體)	主宰神 (總體)
	限定的條件	無明 (個別體)	マーヤー (māyā) (總體)
	特性	[熟睡状態]	
第二 状態	名稱	タイジャサ (個別體)	ヒラニヤガルバ (總體)
	限定的條件	微細な身體 (個別體)	微細な身體 (總體)
	特性	[夢眠状態]	
第一 状態	名稱	ヴィシュヴァ (個別體)	ヴァイシュヴァーナラ (ヴィラージュ, 總體)
	限定的條件	粗大な身體 (個別體)	粗大な身體 (總體)
	特性	[覺醒状態]	

アドヴァイタ學派における主宰神觀の變容（眞鍋）

表4 SBにおける「アートマンの四状態説」（マドゥスーダナの獨自説）

		個我に關して (内的器官とその潜勢力有り)	神に關して (内的器官とその潜勢力無し)
第四 状態	名稱	目撃者たる精神性（ブラフマン）	
	限定的條件	なし	
第三 状態	名稱	プラージュニャ	ルドラ (主宰神の分類)
	限定的條件	未發現者＝無明	無明の暗質性
	特性	熟睡状態	歸滅
第二 状態	名稱	タイジャサ	ブラフマー (主宰神の分類)
	限定的條件	ヒラニヤガルバ＝微細な元素 (個別體かつ總體)	無明の激質性
	特性	夢眠状態	創出
第一 状態	名稱	ヴィシュヴァ	ヴィシュヌ (主宰神の分類)
	限定的條件	ヴィラージュ＝粗大な元素 (個別體かつ總體)	無明の純質性
	特性	覺醒状態	維持

〈キーワード〉 Advaita Vedānta, Madhusūdana Sarasvatī, īśvara, Pañcadaśī, Siddhāntabindu

